

# 相談室だより (米の山)

2015年1月



新年あけましておめでとうございます。 米の山病院の坂口です！

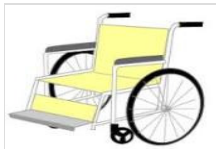
新しい年が始まりました。みなさんはどのようなお正月を迎えられたでしょうか。去年は消費税が5%から8%に増税し、私たちの生活がどんどん苦しくなっているのを実感します。また、8月広島県北部の土砂災害、9月御嶽山噴火、10月大型台風18・19号上陸、12月大雪被害など自然災害も多くある年でした。これほどたたみかけるように災害があちこちで起きているニュースを聞くと、地球が悲鳴をあげているように感じます。お正月休みに娘とジブリシリーズを見ながら（見させながら？）、地球にやさしい生活を送らなければと、改めて感じました・・・

今年もソーシャルワーカーが何をしているのか、どのような問題が起きているのか、などなど、発信していきますので、「相談室だより」をよろしくお願ひします！！

## 【こんな事例、紹介します・・・】

65歳、女性、夫と2人暮らし。

脳出血発症しリハビリ目的にて当院に入院された方です。夫と2人暮らしですが、2人とも年金がありません。夫は体力が続く限りはと働いておられ、6万円/月ほどの収入があります。本人さんには親の代からの貸しアパートがあり、家賃収入が4万円/月ほどあります。入院前は1日分の食事代を800円で抑えるように努力していたとのことでした。足りないときは近くに住む娘さんの援助を受けられていましたが、**できるだけ娘の迷惑にはなりたくない**というのがご主人の口癖です。



本人さんはリハビリの効果もあり、経鼻経管栄養から経口摂取できるようになりました。しかし、まひや失語症が残り、自宅での介護はむずかしい様子でした。娘さんとしては、施設や転院を

希望されましたが、ご主人はなんとか家に連れて帰りたい、また一緒に大好きだったビールで乾杯したいと、涙を流されていました。連れて帰りたい一心で、病棟でおむつ交換の練習・リハビリの見学を毎日するご主人に話を聞くと、家に連れて帰りたい思いだけでなく、娘さんに迷惑をかけたくない、施設や転院となった時の経済的援助を娘にさせたくないという「父親」としての思いがありました。

娘さんにも話を聞くと、そのようなお父さんの思いを全部分かった上で、経済的な事よりも介護をしていく中でお父さんまで倒れたら、という大きな不安を抱えていらっしゃいました。

## 親を思う子、子を思う親・・・

同じ方向を向いているようですが、お互いの思いが強く、まるで反対方向を向いているようでした。

ご主人・娘さんと3人で面談。ご主人はやはり、家に連れて帰りたいと話され、娘さん介護はできないだろうから施設入所か転院を希望すると話さ

れ、2人の思いは平行線でした。

問題点は、家に帰った場合の介護力の問題と施設や転院となったときの経済的問題。

その解決のため、まずは生活保護（※1）の申請を提案。ご主人も検討されていた様子だったため、申請へ。その間の医療費は、無料低額診療事業（※2）の申請を行いました。

そして、自宅近くにある生活保護の方でも入居可能な住宅型有料老人ホーム（※3）への入所を提案。生活保護の申請が認められ、この住宅型有料老人ホームに入所すれば、経済的な心配をする必要はありません。もちろん、施設入所となれば、夜間帯の介護やご主人の介護疲れを心配することもあります。むしろ、介護を積極的にしたいというご主人の希望も、施設に出向くことのできるようになります。この提案にご主人も納得。

「娘がたくさん考えてくれたうえで決めたことやけん、これからは娘の言うことば聞くごとしませす」と、笑顔で話されていました。

### 【おさらい】

#### ※1 生活保護（通称：せいほ）

・・・資産や能力などを利用して生活に困窮する人に対して、必要な保護を行い、健康で文化的な最低限度の生活を保障し、その自立を助長する制度。

#### ※2 無料低額診療事業（通称：むてい）

・・・低所得者などに医療機関が無料または低額な料金によって診療を行う事業。親仁会では米の山病院・中友診療所・野ばら診療所が実施。

#### ※3 住宅型有料老人ホーム

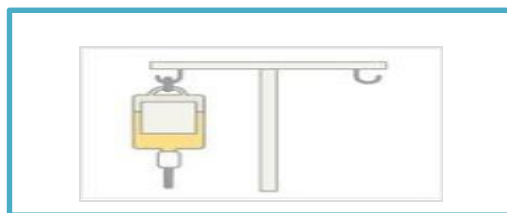
・・・民間事業者が運営する介護施設で、介護が必要なときには訪問介護や通所介護などの外部の在宅サービスを利用しながら、施設生活を送る場所。



このご家族の生活は、病気をきっかけに大きく変化することとなりました。そこには、ちゃんと治るのだろうか、どれくらい入院するのだろうか、また同じようなことが起きるのではないかなど不安でいっぱいです。

その中で、親として、子として、それぞれの立場で退院後の生活を考えていらっしゃいました。ソーシャルワーカーとして、まずは、それぞれの思いを聞き、利用可能な制度や施設などの選択肢を提供し、一緒に考え、「親子」で答えを出していただくことを意識しました。

面談を通して、お互いを思うばかりにすれちがっていたことに気づいてもらう役割に私になれていたらと思います・・・



私たちは、日々、患者さんと接し、入退院を目の当たりにしているため、病気になるということ、入院するということがいかに不安かということをついつい忘れてしまいがちです。

自分が入院したら…、自分の親や子供が入院したら…と、自分に置き換えて、常に患者さんと接していかなければならないと改めて感じました。

※ 来月は みさき病院 ソーシャルワーカー 山下 が担当します！  
こう、ご期待！！